

1 はじめに ←章 (大見出し)

『リメディアル教育研究』(以下、本会誌)の場合、投稿者は学会誌のサイトから投稿システムにアクセスし、著者情報、記事種別、タイトル、要旨、キーワードは、投稿・査読システムの該当画面で入力して、投稿が完了する。

投稿前には、学会誌サイトで最新の「投稿規程」「執筆要項」を確認してほしい。各種別の論文の内容と原稿ページ数、等が記載されている。

印刷原稿(電子出版含む)の本文は2段組、24字×42行×2段である。なお、原稿提出時には、ページ番号は入れない。

Wordを使用する場合、このテンプレートに上書きすることで、印刷原稿に近い原稿が作成できる。査読者の負担軽減のため、投稿者はテンプレートに沿って原稿を作成してほしい。

2 原稿の作成について

2.1 本文 ←節 (中見出し)

2.1.1 文字 ←節 (小見出し)

和文原稿の場合、基本的には、全角(明朝, 10.5pt)で作成する。英文原稿の場合は、半角(Century, 10.5pt)で作成する。本文中のアルファベットと数字は、すべて半角(Century, 10.5pt)とする。ただし、Centuryはイタリック体に対応していないため、必要があればCenturyを用いなくても良い。ローマ数字は全角(明朝, 10.5pt)である。

なお、これら英数字の字体は、表記の揺れを統一するため、印刷時に印刷所が修正する場合がある。

2.1.2 括弧

括弧は、括弧内に全角文字がある場合、全角括弧を使用する。たとえば、文部科学省(以下、文科省)の両括弧は全角である。一方、括弧内がすべてアルファベットや数字などの半角文字の場合、半角括弧を使用する。たとえば、谷川(2012)の両括弧は半角である。

2.1.3 句読点

本文中の句読点は、原則として、和文の場合は「。」、「,」(全角)、英文の場合は「.」「,」(半角)である。その他の言語や数式等が入る場合には、適宜、判断する。

2.2 見出し

印刷原稿の見出しは、すべてゴシックである。サイ

ズはすべて本文と同じ10.5ptとする。

それぞれの見出しには、階層に準じた通し番号を付ける。見出しの数字部分は、半角である。ただし、大見出しのみ数字も全角で太字とする。

「大見出し」は、章(「**1 はじめに**」など)、「中見出し」は、節(「**2.1 本文**」「**2.2 見出し**」など)、「小見出し」は項(「**2.1.1 文字**」「**2.1.2 括弧**」など)を指す。

大見出しと中見出しの場合、見出しの上は1行あける。ただし、大見出しと中見出しが続く場合にはその間はあけない。また、小見出しの場合には、上下に行をあけない(このテンプレートの通りである)。

2.3 見出しに関する注意点

見出しの段数は3段(大見出し、中見出し、小見出し)までとする。階層はこのレベルまでに収め、これ以上に見出しを深くしない。

見出しは、見やすさの観点から1行で収まるように簡潔に書いてほしい。やむを得ず見出しが2行以上にわたる場合、2行目は次のように1行目の文頭に揃える。

2.3.1 見出しを1行に収めることができない場合の見出しの書き方

2.4 図表

2.4.1 図と表の定義

「表」は文字・数字・罫線で構成されたもので、数値自身が説明的な意味を持つものである。例えば、収支報告、成績表などは表である。ただし、数値がなく、文字情報だけであっても、罫線で区切ってあれば表とする。例えば、時間割、旅程などは表である。

一方、「図」は、表以外のもので、物の形状などが描写され、それが説明的な意味を持つものである。例えば、グラフやフローチャートなどは図である。また、写真は図である。

2.4.2 図表の色

本会誌の印刷は原則として白黒になる。事前に必ず白黒印刷をして、読み取りに支障がないことを確認する。図表には外枠を付け、背景は無色とする。

なお、カラー印刷については、原稿の採択後、編集委員会がその必要があると認める場合のみ可となる。

この場合は筆者の実費徴収で対応する。

2.4.3 印刷仕上がりでの配置

図表は、原則として、本文で言及があった箇所以降に埋め込む。貼り付ける図表が1段に収まらなければ、左右2段にまたがってもよい。

図や表は、本テンプレートの図1または表1のように、本文と図表の間は1行あけ、本文中に埋め込むように配置する。

ただし、図表の位置は、最終的には印刷所のレイアウトにより、原則として印刷時には段の最上部あるいは最下部にまとめられる。

2.4.4 図題と表題

図題は、図の下に付ける。図題には、通し番号を付ける。「図1」のように、図題はゴシック、図番はArialである。たとえ原稿中に図が一つしかなくても、「図1」となる。



図1 図題はセンタリング

表題は、表の上に付ける。表題には、通し番号を付ける。「表1」のように、表題はゴシック、表番はArialである。たとえ原稿中に表が一つしかなくても、「表1」となる。

表1 表題はセンタリング

表

図題・表題が2行以上にわたる場合は、2行目以降の書き出し位置は、1行目の図題・表題の書き出し位置に揃える（書き方は、2.3.1を参照）。

2.4.5 図表の本文中での言及

すべての図表は、本文中で必ず言及する（本文中に言及のない図表が原稿に含まれていないことを確認する）。なお、図または表に本文中で最初に言及する際は、図1や表1のように、ゴシック+Arialで表す。同一図表に再度言及する場合は、図1や表1のように、明朝+Centuryとなる。

3 本文中の引用資料の記載

本文中の文献の引用方法や引用・参考文献の書き方については、以下の通りである。

3.1 著者年号方式

本文中の引用・参考文献は、著者年号方式（ハーバード方式）で書く。文中には下記のように資料を特定できる情報（著者名と発行年）を載せる。

リメディアル教育 (remedial / developmental education) というタームは、荒井 (1995)、羽田 (1996) によって初めて提示された (谷川, 2010)。アメリカの学会や社会における受容の様相については Arendale (2005) が詳しく論じている。

引用ページを示す場合には、本文中で (長尾, 2019, pp.15-16) あるいは、長尾 (2019, pp.15-16) 等のように示す。地の文のカンマは全角だが、この場合は半角カンマ+半角スペースである。

背景の理解や知識に関する情報を与えるために文献等の資料を引用したい場合には、本文や注釈の中でその旨を明記する。

3.2 著者が複数の場合

共著者が2名の場合は、寺田・長尾 (2013) や (寺田・長尾, 2013) のように、2名の筆者を全ての引用箇所を書く。英文の場合は、Nozaki & Ogawa (2013) や (Nozaki & Ogawa, 2013) のように「&」を使用する。

共著者が3名以上の場合には、中園他 (2019) や (中園他, 2019) のように「他」を使用し、第一筆者名を書く。英文の場合も同様に、Wayne et al. (2015) や (Wayne et al., 2015) と表記する。

4 注と参考文献リストについて

4.1 注

注(note)は文末脚注とし、番号は本文中の該当箇所

の右肩に ρ のように上付き文字で表記する。数字と括弧は Century である。同じ箇所に複数の注釈が関わる場合には、1²や1⁴のようにする。

注は、本文のあとに1行あけて書く。文字の大きさについて、見出しは10.5pt、本文は10.0ptとする。本文中の言及箇所に付した注番号と注釈の番号とが対応しているかどうかよく点検する。

4.2 引用・参照文献リスト

「注」の後に1行あけて、引用・参照文献リストを書く。リストの見出しは「引用資料」である。これは references の和訳である。

文字の大きさは、見出し10.5pt、本文10.0ptとする。リストは和文と英文を区別せず、筆頭著者の姓あるいは資料作成者の名称をアルファベット順に並べる。和文の場合は、ヘボン式ローマ字の順で並べる。

同じ出版年のものが複数あるときは、2021a, 2021bのようにアルファベットで区別する。また、出版年が不明の場合はn.d.とする。

文献リストの例を本稿末に示すので、参考にしてほしい。

5 その他の注意事項

5.1 検定等で用いる統計量の字体について

検定統計量の表記については、原則として、以下の通りとする。

1) 検定統計量を表す記号の立体、斜字体の区別については、APA第7版(Table6.5)に従う(例えば、 χ は立体である。 t , F は斜体である。)

2) p 値の表記については、小数点前の0を省略する(1%水準ならば、 $p<.01$)。

3) 検定においては、自由度を括弧内に書く(例えば、 $t(151)=3.34$, $\chi^2(1)=12.792$, $F(25, 30)=1.33$ など)。

本文中では2は右肩に数式用の指数(上付き文字)で表示する。その他、カイ二乗検定の統計量は、 χ (カイ)を用い、 x (エックス)で代用しないこと。

5.2 文章表現上の注意

5.2.1 本文の体言止めの禁止

文章として読み上げたときに意味が通じるように書くことを基本とするため、本文の文章では、原則として体言止めはしない。

ただし、どうしても体言止めで項目を列挙したい場合には、小見出しを活用する。または、図あるいは表として構成し、本文から外に出す。あるいは、次のような箇条書きにしてもよい。

①このようなこと

②あのようなこと

③.....

5.2.2 記号について

本文中では「=」「→」などの意味に幅のある記号はできるだけ使わず、文章化する(数式として利用する場合を除く)。使うのであれば、その記号の意味するところをあらかじめ明示する。

5.2.3 対象者の表記

原則として、小学生は「児童」、中学生・高校生は「生徒」、大学生・短期大学生・高等専門学校生は「学生」と表記を統一する。大学院生は「大学院生」とする。

5.2.4 年号について

「平成」や「令和」の年号は使用せず、原則として西暦で表現する。

5.2.5 その他

適切に段落分け、改行をし、読みやすい紙面になるように工夫する。例えば、一章が改行なしで完結している場合、どこかで改行できないか、節で分けられないかを再度検討して欲しい。

また、読みやすさの観点から「字面の白さ」(「及び」よりも「および」、 「従って」よりも「したがって」)が望ましい。また、同一原稿の中で表記を一致させることも査読者のストレスを軽減するので、留意して欲しい。なお、こうした表記のゆれは、印刷所による校正の際に統一する場合がある。

6 おわりに

本学会は、その性格上、様々な学問分野の会員が所属している。投稿者は、専門外の会員が読むことを想定して、言いたいことが確実に伝わるよう、明瞭で平明な文章で書くようお願いする。内容的には高度な原稿が持って回った表現や分かりにくい表現であることがしばしばある。

原稿の文章が明瞭で、平明であることは、オープンアクセスが当たり前の現代の学会誌に必要な資質である。筆者の文体は尊重する一方で、専門外の会員にとって理解が困難と判断される場合は、査読を通過して

も、編集委員会から構成や文章表現等について執筆者に変更を求める場合がある。

注 (この行は 10.5pt)

- 1) 注はこのように、本文末にまとめて書く。ページごとの脚注とはしない。「注」の見出しには通し番号を付けず、ゴシックの太字とする。注の番号とともに、注の文字サイズは、10pt とする。また、「注」と「引用資料」は、文字サイズと行間が異なる。
- 2) 文献リストにおいて共著者名 (20 名以下) は省略せず全員を記入する。共著者が 20 名を越える等、本テンプレートが想定していないケースは APA 第 7 版の書式に従うものとする。

引用資料 (この行は 10.5pt)

- Allen, H.W. (2010). Language Learning Motivation during Short-term Study Abroad: An Activity Theory Perspective. *Foreign Language Annals*, 43, 27-49.
- 中央教育審議会 (2008). 学士課程教育の構築に向けて (答申). 文部科学省.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm (閲覧日:2019年10月10日)
- 藤田大雪 (2016). ソクラテスに聞いてみた: 人生を自分のものにするための 5 つの対話. 日本実業出版社.
- Gregg, K. (1994). Krashen's Theory, Acquisition Theory and Theory. In R. M. Barasch & C. V. James (Eds.), *Beyond the Monitor Model* (pp.37-55). Heinle & Heinle Publishers.
- 平川祐弘 (2019, 12月4日). 一石二鳥の英語教育法開発を. 産経新聞, p.19.
- Krashen, S. D. (1985). *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. Laredo Publishing Co.
- Leonard, W.R. & Crawford, M.H. (Eds.). (2002). *Human Biology of Pastoral Populations*. Cambridge University Press.
- 牧野眞貴 (2018). 学生の心をアクティブにする教員. 中園篤典・谷川裕稔 (編), *アクティブラーニング批判的入門* (pp.65-74). ナカニシヤ出版.
- 増地ひとみ (2018). 日本語ライティング支援に携わる学部生チューター研修の実践報告. 第 14 回全国大会発表予稿集, 日本リメディアル教育学会, 84-85.
- Morales, D. (2019, December 3). Being Your Best Self in Spoken Japanese. *The Japan Times*, p.7.
- 中山誠一 (2011). ビジュアル・シャドーイングの効果. *リメディアル教育研究*, 6(2), 51-59.
- Piaget, J. (1954). *The Construction of Reality in the Child*. (M. Cook, Trans.). Basic Books. (Original work published 1950.)
- 谷川裕稔・石毛弓 (編) (2014). *ピアチューター・トレーニング: 学生による学生の支援へ*. ナカニシヤ出版.
- トロウ, M. 喜多村和之 (編訳) (2000). *高度情報社会の大学: マスからユニバーサルへ*. 玉川大学出版部.

- 堤裕之・畔津憲司・岡谷良二 (2013). *教養としての数学*. ナカニシヤ出版.
- リクルートマネジメントソリューションズ (n.d.). *人材育成・研修・マネジメント用語集*.
<https://www.recruit-ms.co.jp/glossary/dtl/0000000109>
(閲覧日:2021年1月25日)
- 佐渡島沙織・坂本麻裕子・宇都伸之・渡寛法・大野真澄・外村江里奈・中島宏治 (2015). 因子分析による学術的文章作成力の構造解析. *リメディアル教育研究*, 11(2), 39-48.
- Govt Eyes Halt to Funds for iPS Cell Stockpiling. (2019, December 3). *The Japan News*, p.3.
- 日本読解力 15 位に急落 15 歳記述式伸び悩み OECD 調査 (2019, 12月4日). 産経新聞, p.1.

(2021年3月31日版)

1 Arial Bold 10.5pt

1.1 Arial 10.5pt

Century 10.5pt

Table 1 xxx

table

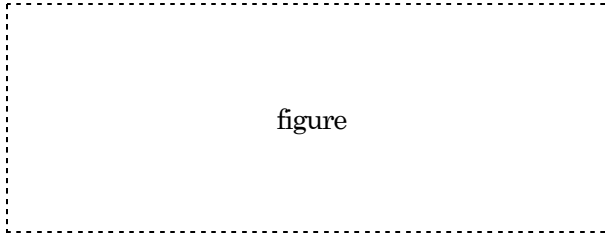


Figure 1 xxx

Notes (Arial Bold 10.5pt)

1)

2)

References (Arial Bold 10.5pt)